

タイトル	アトラ・ハシース叙事詩(Atra-hasis)(1)
著者	桑原, 俊一
引用	北海学園大学人文論集, 43: 1-26
発行日	2009-07-31

アトラ・ハシース叙事詩 (Atra-hasis) (1)

桑 原 俊 一

キーワード：古代メソポタミアの神話，アトラ・ハシース叙事詩，人間の創造神話，洪水神話

古代メソポタミア文学においてギルガメシュ叙事詩と並んで最もよく知られている物語としてアトラ・ハシース叙事詩がある。古代オリエントテキスト（広義の文学テキスト）は旧約聖書の関連から収集されてきた歴史をもつ。その典型ともなった浩瀚な刊行物は *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament (ANET)* で、初版は 1950 年であった¹。それ以降新たな遺跡の発掘や所蔵粘土板の解読作業と地道な研究者の努力によりさらに多くのテキストが刊行されてきた。アトラ・ハシース叙事詩もその一つである。*ANET*³ の E. A. Speiser と S. K. Grayson（補遺）² においてそれはまだ十分再構成されているとは言い難い。

日本において網羅的にオリエント文学の原典訳が出版されたのは『筑摩

学術雑誌等略記号は(1) *The Assyrian Dictionary of the University of Chicago*, ed. Martha T. Roth, et.al. (Chicago, the Oriental Institute, 2005) ; (2) W. von Soden's *Akkadisches Handwörterbuch*, (Otto Harrassowitz, 1966-1981) ; (3) R. Boger's *Handbuch der Keilschriftliteratur* vol. 1 (Berlin, 1967), 661-672. に準拠する。

1 *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament (ANET)* (ed.,) J. B. Prichard, Princeton University Press, 1974. 1969 年には補遺がなされ、1974 年には第 3 版を重ねている。

2 Ibid., 104-106; 512-514.

世界文学大系1古代オリエント集』(1978年)が最初である³。アトラ・ハシース叙事詩はアッカド語による文学として収録されている⁴。しかし残念ながら、W. G. Lambert と A. R. Millard の *Atra-Hasis*⁵ が出版されて間もないという事情もあったと思われるが、原典訳ではなく、英訳からの重訳であった。その後アトラ・ハシース叙事詩はテキスト研究が進み欧米圏では新たな出版もなされてきた⁶。

この作品は前1700年ごろに編纂され、当初は3枚の書板に1245行ほどであったと思われるが、今日では全体の3分の2ほどのテキストが復元可能となっている。本稿では取り上げるテキストの翻字は省略した(Lambert/Millard 参照)。ただしテキストから再構成されうるアッカド語文を併置して訳文を試みた。ただテキストの欠損や欠文・欠字による不明瞭な部分や復元不可な部分も存在する。とりわけこの物語の終局は大変興味深いのであるが、テキストの欠損のため推測によらざるをえないのはまことに残念

3 杉 勇 他『筑摩世界文学大系 1古代オリエント集』筑摩書房、1978年。

4 同上、167-190頁。

5 W. G. Lambert and A. R. Millard, *Atra-Hasis The Babylonian Story of the Flood*, Oxford University Press, 1969 (以下本稿においては Lambert/Millard とする)。本書には M. Civil による The Sumerian Flood Story も同時に翻字と英訳が加えられている。

6 R. Labat (ed.), *Les religions du Proche-Orient asiatique*, Paris: Fayard/Denö, 1970; J. Bottéro, *Mythes et rites de Babylone* Paris/Gneve, 1985, 279-398; Texte aus der Umwelt des Alten Testaments III/3. Güterstoh: Gerd Mohn, 1993; W. L. Moran “Some considerations of form and interpretation in Atra-hasis,” in *Language, Literature and History: philological and historical studies presented to Erica Reiner* (ed.), F. Rochberg-Halton, New Haven, 245-56; S. Dalley, *Myth from Mesopotamia*², *Oxford World's Classics*, Oxford University Press, 2000 (以下本書の参照にさいしては S. Dalley とする).; B. R. Foster “Atra-hasis,” in W. W. Hallo (et al.), *The Context of Scripture*, Brill, 2003, Vol. 1 450-453.

である。それにもかかわらずメソポタミア文学の修辞法として繰り返しの原理も多々施されている個所もかなりあるため物語の概要はほぼ把握できる。訳文については原文テキストを重視したため文の区切れや訳文に違和感があることをお断りしておかなければならない。

アトラ・ハシース叙事詩は人間の創造物語と洪水物語を主要テーマとし、エヌマ・エリシュ（宇宙開闢神話）やギルガメシュ叙事詩とならぶ長編物語である。本稿の訳出は第1の書板1行から181行までとした⁷。物語は神々の時代から始まる。神々の社会は人間と同様な生活を送っており、上位の神々（アヌンナキ）と下位の神々（イギギ）⁸に分かれていた。下位の神々は地上の労働に従事し、上位の神々を支えていたところから始まる。下位の神々の労働はもはや忍耐の限界を越えてしまい、上位の神々に不満と反旗を翻す。イギギたちは過重な労働を訴え、宣戦の布告にまで至る。エンリルの神殿は包囲されことになるが、天上の神々は何も知らない。ようやくことの重大さに気づいたエンリルは武器を取り戦線に備えるところで、イギギたちの訴えを聞き、その解決方法が探られる。この続きは知恵の神エンキ（エア）⁹の出番となる。

主たるテキスト記号は Lambert/Millard の *Atra-Hasis*¹⁰ によった。

A：古バビロニア版テキスト

E：古バビロニア版テキスト

J：後期アッシリア版テキスト

K：後期アッシリア版テキスト

L：後期アッシリア版テキスト

7 原典資料テキスト A=BM 78941 本稿訳文部分を添付した。

8 これらの神々については訳文の脚注を参照されたい。

9 神々の表記について。エンキ（エア）とある場合、括弧内の神名はアッカド語による神名を示す。

10 Lambert/Millard, 40-41.

M：後期アッシリア版テキスト

N：後期アッシリア版テキスト

S：V. W. Soden による復元テキスト¹¹

その他の記号

[]：欠損ないし欠字か不鮮明のため判読不明

ša[r-r]u：文脈から推測可能な文字の復元，ただし極めて推測が確実
と思われる場合は記号を省略した。

x：判読不明な文字

第 1 部

第1欄

A 1 inūma ilū awilmu

神々が人間であったとき¹²，

11 V. W. Soden, “Die erste Tafel des altbabylonischen Arrahasis-Myth. ‘Haupttext und Parallelversionen,” ZA 68/1 (1978) 50-94. 第1の書板 A 19-26 行が相当する箇所。

12 awilum の -um を locative と解し，比較の意味で like men (Lambert) や instead of man (Dally) と英訳しているが OB テキストには妥当しない。いづれにせよ，人間の創造は神々の労働の肩代わりとする創造論が前提とされている以上，人間の「代わりに」或いは「ように」を補足的に解釈する必要は特にない。人間創造に先立つこの前文部分は，神は既に人の像であることが前理解されていると捉るべきであろう。つまり，神と人間とはっきり区別がされていない状態が原初の世界であったのである。この視点はメソポタミアにおける創成神話の大きな特色である。Von Soden はこの行を「Als die Götter (auch noch) Mensch waren」とし，B. R. Foster はそのまま “When gods were man” と訳出している。更に一般的に文学の書き出しと終わり方は興味深い。inuma (…の時) で始まるお馴染みの作品といえば，エヌマ・エリシュ（創成物語）とダウンヌの神統記がある。旧約聖書における創世記の

- 2 ublū dulla izbilū šupšikka
彼らは苦役¹³に服し，重労働¹⁴にあえいだ。
- 3 šupšik ilī rabīma
神々の労役は甚大で
- 4 dullum kabit mād šapšāqumu
苦役は重く，苦悩は多かった。
- 5 rabūtum ^dAnunnak sebettam
7人の大いなるアヌナキ¹⁵は
- 6 dullam ušazubalū ^dIgigi
イギギ¹⁶に苦役を負わせた。
- 7 Anu abuāšunu šarru¹⁷
彼らの父アヌは王，

書き出しと，いわゆる原初史の背景に古代メソポタミア文学との関係をめぐって幾他の議論がなされている。これらについては本稿の目的ではないので注にとどめる。

- 13 dull は苦悩より重労働を意味する。
- 14 šupsikku (tupšikku) はシュメール語 ZUB.ŠĪG「強制労働」を意味する。具体的には運河の掘削による土砂を畚で運ぶ重労働のこと。畚を担うこと。
- 15 アヌナキないしアヌナク/アヌナは“高貴の子”の意味か不明である。初期シュメール語テキストに認められる。アヌ（アン）はアヌナクの王として描写される。創造叙事詩の中では天と地のアヌナクと呼ばれる。文学作品ではイギギの上位にする神々の総称として出てくるが，前2千年紀以降は冥界の神々を指して使用される。
- 16 イギグあるいはイギギという集合神の語源は不明である。古バビロニア時代から現れ始める。アヌナクという集合神と対応関係にある。
- 17 ギルガメシュ叙事詩 XI に類似の表現が見られる。
- 15 [x]-ba-šu ab-šu-nu ^dA-nu-um [] 彼らの父アヌ
- 16 ma-lik-šu-nu qa-ra-du dEn-lil 彼らの顧問官，英雄エンリル
- 17 gu-za-la-šu-nu ^dNinuruta 彼らの侍従，ニヌルタ
- 18 gu-gal-la-šu-nu ^dEnnugi 彼らの運河監督官エンヌギであった

- 8 mālikušunu qurādu ^dEnlil
彼らの顧問官は英雄エンリル、
- 9 guzzalûšunu ^dNinuruta
彼らの侍従¹⁸ はニヌルタ、
- 10 gallûšunu ^aEnnugi
彼らの運河管理官はエンヌギであった。
- 11 ihuzū mātiša
彼らは国土を取り、
- 12 iṣáqan iddû ilū izzuzū
神々は籤を投げ（て）分割した¹⁹。
- 13 [Anu] itieli šamêša
[アヌ] は天に向け昇って行った。
- 14 [Enlil? ileq] qe erṣtam ba'ulātuššu
[エンリル] は人のために大地を取った。
- 15 [šigara n] ahbalu tiāmtim²⁰
海の間である [差し錠は]
- 16 ittadnū ana ^dEnki naššiki
思慮深い²¹ エンキに付与された。
- 17 ištu Anumu ilū šamêša
アヌが天に昇ってしまい
- 18 u ilū ana Apsî itardu
そしてアプスーの神々が下ってしまうと

18 [gu₅(ku)-u] z-za-lu-šu-nu 玉座を運ぶ者が原意である。

19 古代メソポタミアでは子どもたち（息子たち）の間で、土地の財産分与をするとき籤を投げて分け合った。Dalley の注 4 参照。

20 'ah  tim 

21 nassiku/nissiku はエアの敬称。

- 19 S [^dAnunaku su] ūt šamāi
 天の [アヌンナキ] は
- 20 S [dullam iš] kunū elū ^dIgigi
 イギギに [労役] を負わせた。
- 21 S [ilū nārātīm] iherrûnim
 [神々は河] の掘削を始めた。
- 22 S [palgī iptû na] pištīm mātīm
 [彼らは] 運河 (と) 国土の命を [開いた]。
- 23 S [^dIgigu nārātīm i] hêrrunim
 [イギギは河] の掘削を始めた。
- 24 S [palgī iptû nap] ištim mātīm
 [彼らは運河] (と) 国土の命を [開いた]。
- 25 S [ilū ihrû ¹⁷Idi] glat²² nārām
 [神々は] チグリス河を [掘削した]。
- 26 S [u Parattam wa] rkītam
 その後ユフラテス河を。
- 27 [ina n] aqbi
 [] 深きところに
- 28 [išt] aknū
 [] 彼らは据えた。
- 29 [Ap] sū
 [] アプスー²³
- 30 [] x-at mātīm

22 シュメール語 IDIGNA と読める。

23 シュメール語 ABZU 知恵の神エンキ (エア) の住まいとする領域。古代メソポタミアの宇宙観によれば、大地の真下に存在すると考えられている。アプスーは湧水、泉、川の水、井戸水の源泉と理解され、海(海水)はアプスーと対極であって、大地は海で囲まれていると信じられていた。

- [] 国土
- 31 [] a qiribšu
[] その中に
- 32 [ul-1] û rēšišu
[] 彼らはその頂を持ち上げた。
- 33 [k] ala šadi
[] 全ての山々の
- 34 [šanātim imnû] ša šupšikki
彼らは重労働の年々を数えた。
- 35 [] x šuša rabia
[] 大湿原
- 36 [šanātim im] nû ša šupšikki
彼らは重労働の年々を数えた。
- 37 [^aIgigi ?] x 40 MU.HI.A (šanātim) atram
[イギギ(?)] は 3600 年²⁴ の長期を耐えた。
- 38 [xx du] llam izbilū muši u urri
彼らは苦役を負った、夜も昼も。
- 39 [idabu] būma ikkalu karši
彼らは不満をいい、非難しだした。
- 40 [uttaz] zamū ina kalakki
彼らは嘆いた、掘削された土砂の多さを。
- 41 [xx] x ni ²⁵(GI.ZA.LÁ) guzzalâ inimhuruma
『立ち向かうぞ、われらの [] 従者、
- 42 [ka] btam dullani lišašik elni

24 数値の最大値、つまりこの文脈では数えることができないほどの長期間を意味する。

25 Von Soden は [la?-pu?-t] a?-ni われらの監督長を補う。

彼はわれらの苦役からわれらを解放しよう。

43 [xx m] ā²⁶lik ilī qurādam

[来たれ,] 神々の顧問官にして英雄,

44 [al k] ānim iniššā²⁷ ina šubtišu

来たれ, われらは彼の住まいから彼を連れ去ろうぞ。

45 [^dEnlil m] ālik ilīqurādam

[エンリル,] 神々の顧問官にして英雄

46 [alk] ānim i niššā ina šubtišu

われらは彼の住まいから彼を連れ去ろうぞ。』

47 S [^dAlla]²⁸ piašu ipušamma

[アッラ] は彼の口を開き²⁹,

48 [issaqa] r ana ilī ahhišu³⁰

彼の兄弟たちの神々³¹ に告げた。

49 S [] GU.ZA.LA la-bi/am] -ru-tim³²

50 [] x

51 []

52 [] x-ni

53 []³³

26 Von Soden は [be?-lam?-m] a 「主なる」と読む。

27 Lambert/Millard は動詞を šāšû ‘desturb’ と取るが, našû ‘take away’ と取るほうが文脈に沿う。

28 S. Dally による復元。Von Soden は [^dEnki] する。

29 pāšu ēpuš は「口を開て, (言った)」と伝統的訳語に従った。Dalley は ‘made his voice heard’ と訳するが, 日本語訳にはなじまない。

30 ah 

31 イギギたちを指す。

32 以下 8 行は欠損が甚だしい。

33 Lambert/Millard はテキスト J から復元している。

- 54 []
- 55 []
- 56 []
- Aii 1 57 mālīk ilī qurādam
『神々の顧問官にして英雄，
- 2 58 alkānim³⁴ i niššīa ina šubtišu
来たれ，われらは彼の住まいから彼を連れ去ろうぞ。
- 3 59 ^dEnlil [mālīk] ilī qurādam
エンリル，神々の顧問官にして戦士，
- 4 60 alkānim i niššīa ina šubtišu
来たれ，われらは彼の住まいから彼をつれ去ろうぞ。
- 5 61 anumma tisiā tuqum³⁵ tam
さあ，宣戦を布告だ。
- 6 62 tāhazu i niblula qablam
戦闘と戦争を混在させよう。』
- 7 63 ilū išmû zikiršu
神々は彼のことばを聞いた。
- 8 64 išatam nēpišišunu iddûma
彼らは道具に火をつけた。
- 9 65 marrišunu išatām

-
- 1 [] [彼を] 殺害しよう。
- 2 [] 軛を打ち砕こう。
- 3 [] 彼は口を開いた。
- 4 [そして宣言した]，神々，彼の兄弟たちに。
- 5 [] 往にしの侍従。

34 nim を補う。44 行参照。

35 um 

彼らは柱鋤に火をつけた。

10 66 šupšikkišunu ^dGira³⁶

彼らの畚に火神を

11 67 it³⁷takšū

放った。

12 68 itah³⁸azūnim illakūnim

彼らは激怒し、出かけた。

13 69 bābišatmāni³⁹ qurādi ^dEnlil

英雄エンリルの神殿の門へ。

14 70 mišil maṣ⁴⁰ṣarti mušum ibašši

夜番の半ば、夜であった。

15 71 bītu(^É) lawi ilu ul idi

神殿は包囲された。(が) 神は知らなかった

16 72 mišil maṣṣarti mušum ibašši

夜番の半ば、夜であった。

17 73 Ekur lawi ^dEnlil ul idi

エクル⁴¹ は包囲された。(が) エンリルは知らなかった。

18 74 ūtteqi ^dKalkal ūteši

カルカル⁴² は気づいて、不安になった。

36 シュメール語 ^dBIR.GI で表記。

37 it 

38 ah 

39 (w)atnanu 住居を意味するが、ここでは詩的表現としての神殿。

40 az/ṣ/s 

41 ニップル神殿。冥界の名称ともなる。

42 エクルの門衛。

- 19 75 ilput sikkura ihīṭ [xx]⁴³
彼は差し錠を掴み, [門] を見守った。
- 20 76 ^dKalkal iddēki [^dNusku]
カルカルは [ヌスク] を起こした。
- 21 77 rgma išemmû ša [^dIgigi]
彼らは [イギギ] の騒音に耳を傾けた。
- 22 78 ^dNusku iddēki belšu
ヌスクは彼の主人を起こした。
- 23 79 ina majjāli ušetbišu
彼(ヌスク)は彼を寢床から連れ出した。
- 24 80 bēlilawi bītika
『ご主人さま, あなたさまの神殿が包囲されています。
- 25 81 qabilum⁴⁴ irūša ana bābika
戦いがあなたさまの門に迫っています。
- 26 82 ^dEnlil lawi bītka
エンリルさま, あなたさまの神殿が包囲されています。
- 27 83 qablum irūša ana bābika
戦いがあなたさまの門に迫っています。』
- 28 84 ^dEnlil kakkī ušardī ana šubtišu
エンリルは住まいに武器を持ち込ませた。
- 29 85 ^dEnlil pāsu ipušumma
エンリルは口を開いて,
- 30 86 ana sukkalli(SUKKAL) ^dNusku iakar⁴⁵

43 文脈から [ba-ba] を補う。

44 lum 𒄩𒂗

45 kār 𒀭𒂗

宰相ヌスクに言った。

31 87 ^dNusku edil bābka

『ヌスクよ、おまえの門を閉じ、

32 88 kakkīka leqe iziz mahrija

武器をとって、わが前に立て。』

33 89 ^dNusku ēdil bābšu

ヌスクは門を閉ざし、

34 90 kakkīšu ilqe ittazizu mahar⁴⁶ ^dEnlil

武器を取って、エンリルの前に立った。

35 91 ^dNusku piasu ipušamma

ヌスクは語って、

36 92 izzakar ana qurādi ^dEnlil

英雄エンリルに言った。

37 93 bēli būnu būnuka

『ご主人さま、あなたさまのお顔はタマリスクです⁴⁷。

38 94 mārū ramanika mīnšu taddur

なぜご自分のお子たちをお恐れなさるのですか。

39 95 ^d Enlil būnu būnuka

エンリルさま、あなたさまのお顔はタマリスクです。

40 96 mārū ramanika mīnšu taddur

なぜご自分のお子たちをお恐れなさるのですか。

41 97 šupur anam lišeridunimma

お送りくださいませ。アヌが連れて来られますように。

46 har



47 タマリスクの樹のように青ざめていること。『イシュタルの冥界下り』に同様な表現がみられる 29 行目参照。

- 42 98 ^dEnlil libbikūnim ana mahrika
エンキがあなたさまの御前に連れて来られますように。
- 43 99 išpur anam ušeriduniš
彼(エンリル)は(遣いを)送り、アヌは連れて来られた。
- 44 100 ^dEnki ibbikūnim ana mahrišu
エンキが彼の御前に連れて来られた。
- 45 101 wašib Anu šarri šamê
天の王、アヌが列席し、
- 46 102 šarri Apsî ^dEnki ūteqqi
アプスーの王、エンキが参列した。
- 47 103 rabûtum ^dAnunnaku wašbu
偉大なアヌナキが列席した。
- 48 104 ^dEnlil itabîma šakin dînu
エンリルが立ち上がり、評決が下された。
- 49 105 ^dEnlil piašu ipšamma
エンリルは口を開いて、
- 50 106 izzakar ana ilî rabûtim
言った。英雄なる神々に向かって。
- 51 107 jâšimma⁴⁸ ittebû
『あの者たちはわたしに立ち向かうのか。』
- 52 108 tāhāzu eppuš ša []
わたしは戦おうぞ []。
- 53 109 inî minâ āmur anaku
わたしはわが眼で何を見たのか。
- 54 110 qablum irūša ana bābija

48 ma は疑問詞。

戦いがわが門に迫っていた』。

- 55 111 Anu piašu ipušamma
アヌは口を開いて、
- 56 112 izzakar ana qurādi ʿEnlil
言った。英雄なるエンリルに。
- 57 113 zikra ša ʿIḡigu
『イギギのことはを（探り出そう）
- 58 114 ilmû bābiška
あなたの門を包囲した者⁴⁹，
- Aiii 1 115 lišima []
スカル⁵⁰ を連れ出しましょう。
- 2 116 tērta []
命令は []
- 3 117 ana mā [rika]
あなたの子た [ちに]
- 4 118 ʿEnlil piašu [ipušamma]
エンリルは口を開いて、
- 5 119 izzakar a [na sukkal ʿNusku]⁵¹
言った。宰相ヌスクに。
- 6 120 ʿNusku pete [bābka]
『ヌスクよ，[お前の門] を閉じよ。
- 7 121 kakkika l [eqe]
武器を取 [って，] (わが前に立て。)⁵²

49 意味上 114 行は 113 行のイギギに係る。

50 テキスト L 9 [] ʿSukal から補う。

51 テキスト L 11 [] kār ana sukk [ali] から補う。

52 S. Dalley, 12 頁参照。

- 8 122 ina pu⁵³hri [kalâ ilima]⁵⁴
すべての神々の集会で、
- 9 123 kimis iziz
膝を屈め、起立して [彼らに告げよ。]⁵⁵
- 10 124 išpuranni [abukunu] Anu
彼はわたしを送られたのだ。[おまえたちの父なる] アヌが。
- 11 125 mālikkunu qurādu ⁴Enlil
おまえたちの顧問官にして英雄エンリルが。
- 12 126 quzzalûkumu ⁴Ninurta
おまえたちの侍従ニヌルタが。
- 13 127 u gallûkunu ⁴Ennugi
おまえたちの運河管理官エンヌギが。
- 14 128 mannumi [illak ana qablim]⁵⁶
「誰が戦いに赴くのか。
- 15 129 mannum uṣṣi ana tākāzi
誰が戦いを仕向けたのか。
- 16 130 mannum igram tuqumtam
誰が戦いを布告したのか。
- Eii 9 131 [] ⁴Enlil
誰がエンリルの門に迫ったのか。』
- 10 132 [] xx
[ヌスクは彼の門を開けた。]

53 uh



54 テキスト F 11 i-na pu-uh-ur k [a-la] より復元する。

55 テキスト Eii 1 [šu-un-ni a-wa-at]-ni] からの復元。

56 テキスト Eii 6 [qa] blim からの復元。

- 11 133 [] xx ʹEnlil
彼の武器を取って、エンリルの下に向かった⁵⁷。
- 12 134 [ana puhrika k] alâ ilîma
すべての神々の集会で、
- 13 135 [] xx ipšur
彼は跪き、起立し告げた。
- 14 136 [išpuranni] -bukunu Anu⁵⁸
彼はわたしを送られたのだ。おまえたちの父なるアヌ
が。
- 15 137 [mālikkunu qurā] du ʹEnlil
おまえたちの顧問官にして英雄エンリルが。
- 16 138 [guzzalûkunu ʹNi] nurta
おまえたちの侍従ニヌルタが。
- 17 139 [u gallûkunu ʹE] nnugi
それに、おまえたちの運河監理官、エンヌギが。
- Aiii 26 140 ma-[]
「誰が戦いに赴くのか。
- 27 141 ma-[] -zi
誰が戦いを仕向けたのか。
- 28 142 ma-[]
誰が戦いを布告したのか。
- 29 143 qa [ʹEn] lil
誰がエンリルの門に迫ったのか。」』
- 31 145 ib-ba [ʹEn] -lil
エンリル []
- 32 146 kulla [t kalâ ilima nigrâm tuqumtam]

57 133 行から 135 行は 121 行から 123 行を参照。

58 以下 144 行までは 124 行から 132 行参照。

『われら神々の一人一人が悉く戦いを宣言しました。

33 147 nišku [n]⁵⁹

われらは[止めざるを]えませんでした。

34 148 ina k [alakki]⁶⁰

掘削するのを。

35 149 šupšik [ku atru iddūkniati]

過酷な重労働がわれらを殺害しました。

36 150 kabit dullanima mād šapšaḡum]

われらの苦役は耐え難く、苦痛はもうたくさんだ。

37 151 u kullat kalā ilīma

そこで、われら神々の一人一人は悉く

38 152 ūblā pini [nabābam itti ^dEnlil]

同意したのです。エンリルに不満を訴えるために。』

39 153 ^dNusku ilq [e kakkīšu]

ヌスクは彼の武器を取ると、

40 154 illik u [x]

出かけて、[エンリルのもとへ引]き返した。]

41 155 bēli ana tašpranni

『ご主人さま、あなたさまはわたしを遣わされました。

42 156 allik ana [xx] ti

わたしは行って []

43 157 apš [ur] rabitam

わたしは説明しました。[]

44 158 na-ab/ap] -ka?-sī?

[]

59 161 行参照。

60 同上。

- 45 159 ku [l̥lat kalâ il] imami
 言った。『われら神々の一人一人は悉く
- 46 160 ni [grâm tuqmtam]⁶¹
 戦いを宣言しました。
- 47 161 ni [škunu] -ni ina kalakki
 われらは掘削するのを [止めざるを] えませんでした。
- 48 162 š [upšikku atru id] ūkuniati
 過酷な重労働がわれらを殺害しました。
- 49 163 [kabit dul] lanimā mādu šapšaḡum
 われらの苦役は耐え難く、苦痛はもうたくさんだ。
- 50 164 [u kull] at kalâ ilima
 そこで、われら神々の一人一人は悉く
- 51 165 ū [blā] p̄ni nabābam itti 𐎶Enlil
 同意したのです。エンリルに不満を訴えるために。』
- 52 166 iš [me awātum šuati
 彼 (エンリル) はそのことばに耳を傾けた。
- 53 167 𐎶Enlil illaka dīmāšu
 エンリルは涙を流した。
- 54 168 𐎶Enlil ittašar awassu
 エンリルは慎重にことばを
- 55 169 izza [kar qur] ādi Anim
 話しかけた。英雄アヌに。
- 56 170 etel [li ištika ana šamāi
 『高貴なお方さま、あなたさまとともに天に
- K 4 171 paršam taba [lma leqe iduka]⁶²

61 146 行参照。

62 テキスト M [le-] qé i [d] -ka

ご命令を携え、あなたさまの力強さをお示し下さい。

5 172 ašbu ^dAnunnanki maharka

アヌナキはあなたさまの御前にお座りです。

6 173 ilu išten ši [sima lidušu dāmta]⁶³

一柱の神が呼び出だし、投げつけて殺しましょう。

7 174 ^dAna pāšu ipuša [ma]

アヌは口を開いて

M 12 175 [izza] kkar ana ili ahhēšu

言った。彼の兄弟である神々に。

K 8 176 minam karšišunu nikkal⁶⁴

何事でわれらは彼らを告発するのか。

9 177 kabit dullašun mād šapšašun⁶⁵

彼らの重労働はあまりにも重く、苦痛はあまりにも大きい。

M 15 178 [ūmišama x] naṭu⁶⁶

日々大地は []

16 179 [tukku kabit] nišemme rigma⁶⁷

悲嘆の声は重々しく、われらは騒音を聞き続けているのだ。

12 180 [] epeši

[] 行う

13 181 [iškā] ratu

63 テキスト M 1 [] li-id-šu dam-ta

テキスト L 5 [] ši-si-ma

64 テキスト M 13 [n] i-ik-ka-al

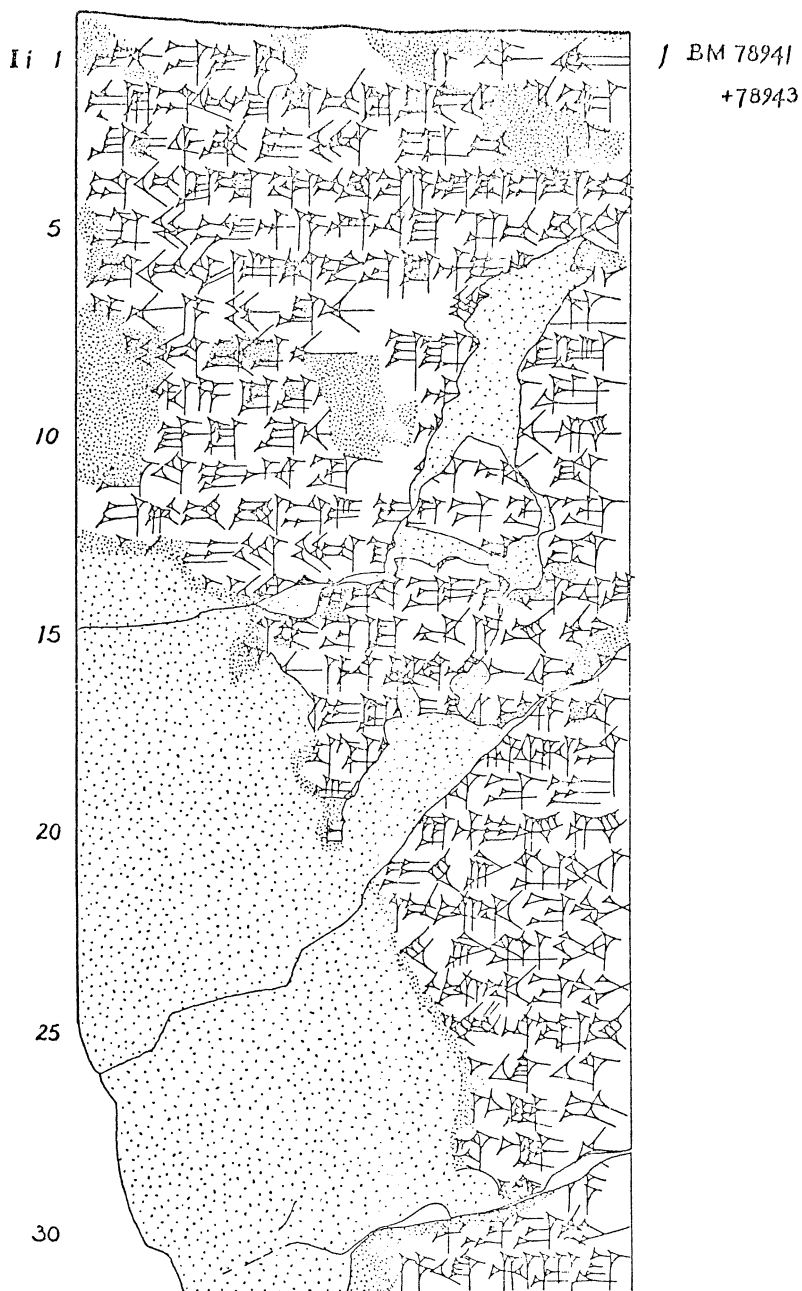
65 テキスト M 14 [a] d ša-ap-šašun

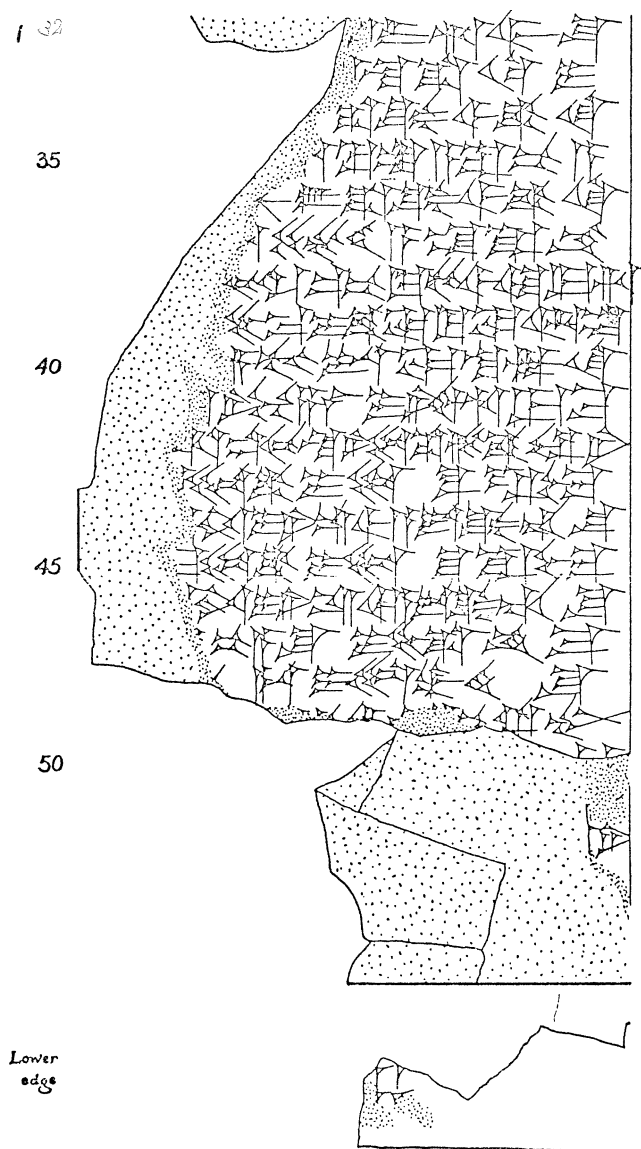
66 テキスト N 7 [u₄-mi-šam-m] a

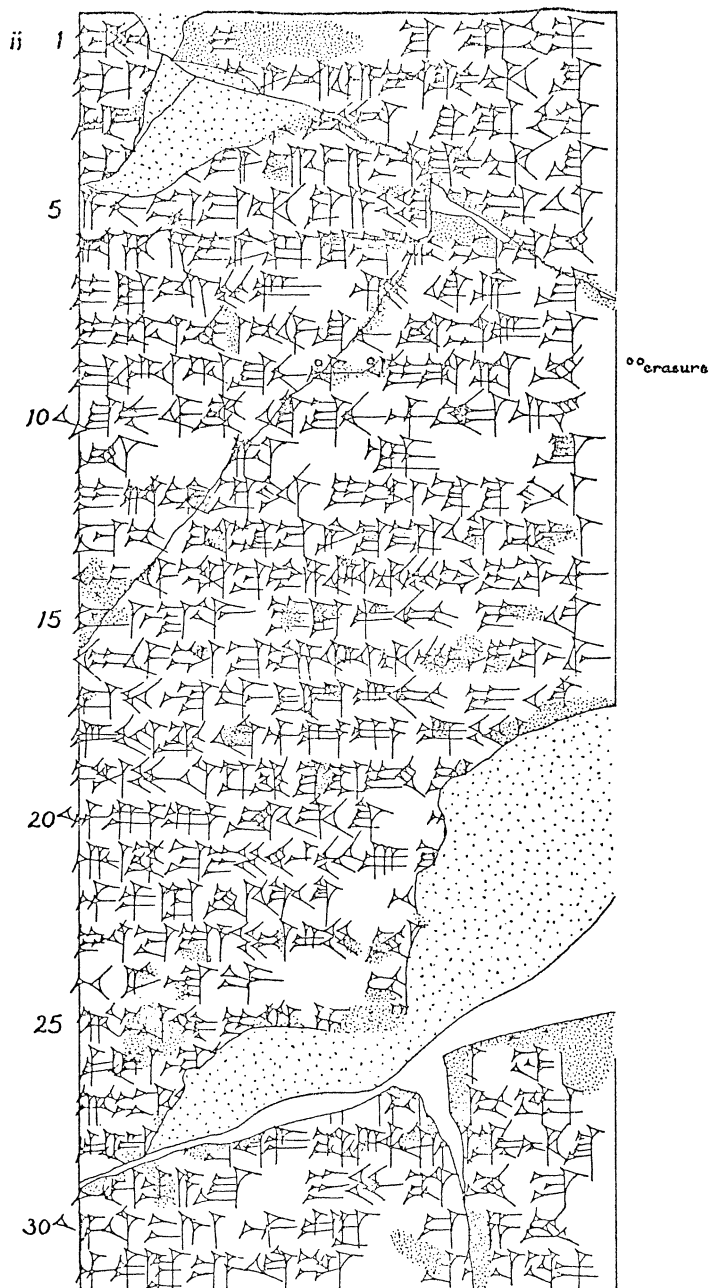
67 テキスト N 8 [tuk-ku ka-b] t i [t-]

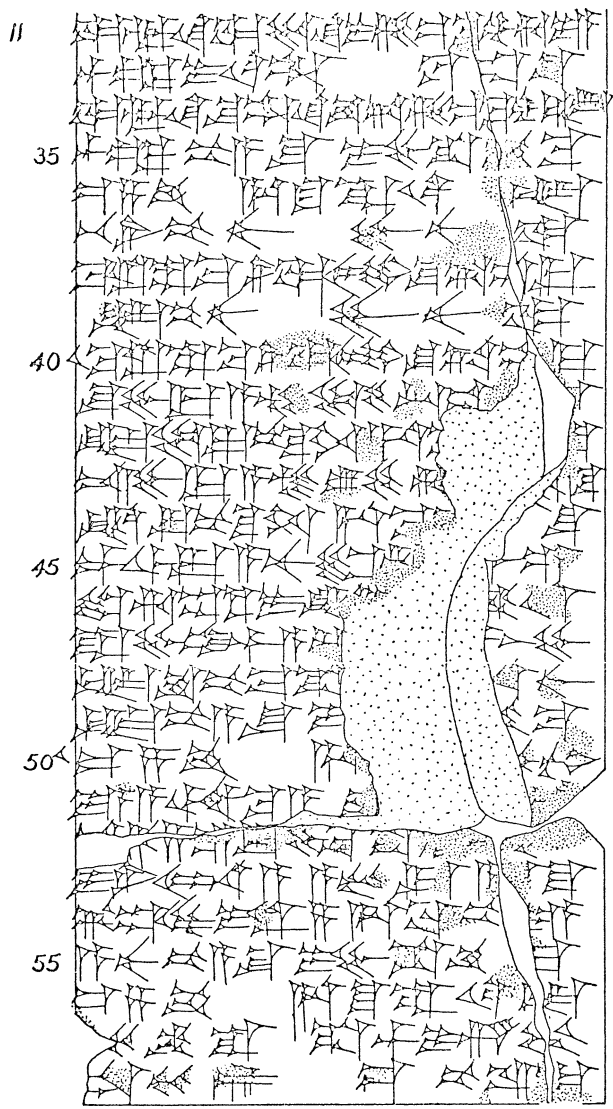
[] 務め

Lambert/Millard は上記に続くテキストとして後期アッシリア語の断片的テキストを挿入する。かなり断片的であり、重複部分も多い。このテキストの継続はイギギたちの過重な労働の嘆願に応え、解決策が提案されるところから始まる。









Lower
edge.



